

無限回廊

山根 研一

あすなろ社

無限回廊

山根研一詩集

〈著者略歴〉

山根研一（やまね・けんいち）

1942年、京都生れ。

詩集『ヘロデの歌』（光風社）

『S氏とX嬢』（青磁社）

詩誌「畫顔」「若葉」を経て「ハ
リー」「餐」「半身」同人。

現代詩人会会員。新波の会会員。

現住所＝埼玉県所沢市本郷855-31

電話＝0429-44-4687

無限回廊

一九八七年二月十五日発行

定価——二〇〇〇円

著者——山根研一

発行者——竹岡準之助

発行所——あすなろ社

〒117 東京都練馬区南田中五—〇—六

電話（〇三）九九六—五二九二

振替＝東京九一六七四四七

印刷——信毎書籍

製本——大口製本

万一乱丁・落丁のときはお取替えします

© Kenichi Yamane 1987

ISBN4-87034-053-4 C1092

無限回廊*目次

PART I

湖に窓が浮かぶ	8
考古学者と蜘蛛	12
シャワーを浴びた男	18
テープに絡まる男と女	22
手紙	27
O嬢の手紙	32
酒呑みの男	37
向日葵	42
手が足になり	45
C嬢のめざめ	48
Q氏の出勤	52
帰宅	59
柘榴	64

お花見——67

PART II

ドラキュラ伯爵——72

ドラキュラ伯爵夫人——75

虫の唄——82

オクサンの買物の日——84

壊れた時計——89

お正月——92

核爆発 X氏の場合——96

少年と鳥——100

廃屋——103

五月の密室——106

旅——110

3日間の航海——114

葬列——120

PART Ⅲ

たそがれ時、インスタント食品F——126

O氏の帰宅——129

ドレスを着た蛾——132

H嬢の物語、Y書房より売出す——137

天使イリイチ・レーニン地上へ——141

寓話性と諷刺と——犬塚堯——158

あとがき——161

装幀／浅田隆夫

中扉装画／藝沼真彦

無限回廊

P
A
R
T

I

湖に窓が浮かぶ

春の野原を超えて

湖を散歩していた男が

ふと後ろを振り返ると

背景が消えていた

湖にはさざ波が立ち

浮いた把手が見えるので

引き寄せると

大きな窓ガラスが

午後の雲を浮かべていた

窓の枠を岸に引き上げ

空の下で把手を開けると

長方形の闇が拡がり

男がその闇の道を歩いて行くと

一本の林檎の木が

風に揺れて

緑の蛇が眠っている

傍には大きな病院の底ひさしが見え

ガラス戸を覗くと

白い椅子に座った女が

暗い部屋の中で

目を瞑つむっていた

彼女は指を切って血をこぼし

貧血を起こしていた

テーブルの上には

林檎とナイフがあり

こんこん、と男が窓を叩くと

途絶えていた噴水から

水が噴き出した

小さな魚が飛び出してくる

女が呟いた

へびっしりと窓が私を見ていて

疲れたわ

ステッキを持った男が

もしもし、と声をかけると

びっくりした女は

悲鳴と一緒に

こなごなに碎けた

男は駈足で林檎の木を抜けて
道に戻ると

あの窓枠が見あたらず
すでに夕暮があたりを
赤く燃やしている
ステッキを持った男が
出口を捜しながら振り返ると
窓は再び湖の中に沈みかかり
壊れたガラスの破片の間から
彫像の女が漂い
堇色の目をして
男を見つめていた

考古学者と蜘蛛

ゼリー状の雨が降る朝
考古学者は傘をさして

散歩しているうちに

道に迷った

へ何ということだゝ

叢に足を取られて

気を失ったが

目を開くと

自分がどれだけ眠っていたかを
考えずに 起き上ろうとして

まだらの蜘蛛を踏みつけた

黄色い汁を足に摺りつけ

べっとりした真珠の雨を払うと

無数の蜘蛛の糸が顔に触れ

朽ちた大理石の回廊が

砂に埋って

ぼんやりと見える

彼の思考は停止したが

本能が叫ぶ

へこの先には何かがある

考古学者は

傘をたたんで突き進むと

蜘蛛の網にもつれこみ

毒蛇がくるりくるり

逃げ出す先に

巨大な神殿の影を見た

彼は興奮して声をたてると

つつつ と走りだした

神殿の上には

まっかな月が

ぼってりと昇っていく

彼は蒼白になりながら

かさかさと太い柱を撫で

進んで行った

滑べる大理石の中を

存分に手足を伸ばして

灰色の溜息をついた

時々洩れる月が

体を風船のように彩り